

づつ完済された。明治十五年八月に有志共立東京病院が開かれ、十六年九月に芝愛宕町に同院が移転した後であった。

「松山棟庵先生伝」にもみられる通り、成医会講習所が設立された頃、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、戸塚文海の四名がそれぞれ一、〇〇〇円宛、他の三十数名の有志が三〇円ないし五〇〇円を分に応じて醸金し、第一回の申し込み金が二一、五一〇円と記されている。但しこれは申し込み金であつて果たしてどれだけの金が集つたかは不明である。「慈大百年史」には十五年八月施療病院開設に当つては、当時の外務卿井上馨を通じて、各国公使館筋の協力を得、民間の醸金約四、〇〇〇円で始められたと記されている。十六年五月には宮内省から恩召金六、〇〇〇円が下賜された。十七年には鹿鳴館でわが国最初のバザーが開催され純益金が薬代として寄付された。十八年十一月のバザーはさらに大がかりで、皇后陛下の行啓を仰ぎ、その益金一四、八六四円がこの施療病院へ寄付された。

金録関係からみただけでも、私立医学校や施療病院を作ることが、当時如何に困難であつたかがうかがえる。

## エルウィン・ベルツと温泉医学

安井 広

E・ベルツは一八八〇年(明治13)七月に内務省中央衛生会から『日本鉱泉論』を出版した。この本につき『中央衛生会第一次年報』に「委員ドクトルベルツ管テ相豆上州ノ鉱泉ヲ経歴シ、其泉質及改良法ヲ論ジ一書ヲ著シ、之ヲ本会ニ出ス。即チ翻訳シテ日本鉱泉論ト名ク」とある。本書の刊行される前月、一八八〇年六月にベルツは温泉に関する建白書を提出しているが、その翻訳が本書である旨『ベルツの日記』に書かれている。その内容は日本には数多くの温泉があつて療養に利用されているが、これを指導する機関がない。政府は含密分析場を設け、現地に医師を常任させて患者に温泉治療を指導さすべきであると説き、さらに温泉地に至る道路の改修、療養患者のための必要施設にも言及している。

(横浜市)

藤浪剛一によると一八七九年(明治12)「内務省ハベルツ

ニ命ジテ本邦各鉱泉ヲ精シク調査セシメテ之ヲ欧州有名ノ  
鉱泉ト比較シ、効果利害ヲ明シシタ草稿ヲ成島謙吉氏ガ翻  
訳シ『日本温泉誌』ト命ジテ公ニシタ」とあるが筆者はま  
だこの書を見ていない。

『朝野新聞』によればベルツが内務省の命を受けて調査  
にかかる前すでに一八七四年(明治7)に政府は独人マルチ  
ンに温泉成分の化学分析を依頼していたという。当時の調  
査方法は不十分なものではあったが、一八八六年(明治19)  
に一応全国各地の温泉について調査を完成し『日本鉱泉  
誌』として内務省衛生局から出版した。

ベルツが温泉医学に関心を持つに至った動機について、  
大島良雄教授はベルツが普仏戦争に従軍した頃、フランス  
は温泉医学の興隆期であったからその影響を受けたのでは  
ないかと言っている。ベルツは日本に来てまもなくから各  
地を旅行しているので、数多い温泉地を見て医学的関心を  
そそられ、研究に着手したのであろう。

温泉医学に関するベルツの論文を挙げると一八八一年  
(明治14)四月 *Chrysanthemum* に “The Hot Baths of  
Japan” と題する講演の紹介がある。これはおもに日本人

の入浴好きを述べたもので、ある外国人医師が日本政府に  
公共浴場は有害であるから閉鎖するよう忠告したのに反対  
し、これを有害と認めず、日本の貧民階級からこの安価で  
健全な娯楽を奪うことは虐待であるとし、また日本に急性  
リウマチが非常に少ない原因を入浴好きに帰している。

一八八四年(明治17) *Berl. klin. W-schr.* に “Ueber per-  
manente Thermalbäder” (中外医事新報一七、一一八号「永  
久温浴ノ説」)を書いている。一般に長時間の入浴は有害と  
されるが、上州川中温泉の例を挙げ、日本人は42~48度の  
中性、弱塩性温泉に一日に何回も入る。自分自身二時間以  
上湯につかっていたが不快感はなかった。新陳代謝につい  
て詳細な研究は行なっていないが、リウマチス、火傷、難  
治の外傷、潰瘍、慢性湿疹等の患者にヨーロッパでもこの  
天然持続温浴を実施するようすすめている。

一八八七年(明治20)九月中外医事新報一七九号に「温浴  
中ニ於ケル皮膚ノ吸収」が載っている。サリチル酸は皮膚  
から吸収されるが、サリチル酸ソーダ、黄色血瀾塩は吸収  
されないとしている。

一八九六年(明治29)出版された *Penzoldt u. Sinzing:*

Handbuch der speziellen Therapie innerer Krankheiten

に "Behandlung mit heissen Wasserbädern" を書いてい  
る (東京医事新誌九七九、九九八、一〇〇一号「熱水治療論」)。

日本人は四三〜四五度の熱水浴をするとしてその生理作用  
を述べているが、熱浴による頭部の熱感、圧重等の苦痛お  
よび心衰弱を予防するための「かむり湯」を賞揚してい  
る。適応症に寒冒、リウマチス、痛風、梅毒、慢性皮膚炎  
等を挙げている。

一八九七年 (明治30) Berl. Klin. W-schr. に "Zur Lehre  
von der Lepra u. ihrer Behandlung" を載せ、草津温泉で  
の癩治療例を報告しているが、癩については Lehrbuch  
der Inneren Medicine 1900 に最良の療法は大楓子油を内  
服し、局処にサリチル酸軟膏を用い、42〜46度の草津の湯  
に一日に四〜五回入ることで、これにより神経の肥厚だけ  
は残るがその他の症状は消失すると言っている。

なお同内科書に載る温泉治療を試むべき疾患として右に  
挙げたもののほかに糖尿病、急性による慢性胃カタル、円  
形胃潰瘍、神経性胃疾患、常習便秘、急性腹膜炎、結核性  
腹膜炎などについて述べている。

## 金沢におけるホルトルマンの

### 外科診療

寺 畑 喜 朔

明治八年七月、スロイスの後任として金沢医学所に着任  
したお雇蘭医ホルトルマンが行った外科診療は、藤本純吉  
筆記による「外科患者治験録」(金沢市立図書館藤本文庫)に  
よって、その概要を知ることができる。

この治験録 (カッコ内はホルトルマンの明記された症例数)  
には、膿瘍十例 (五例)、瘻孔六例 (二例)、腫瘍、腫瘤五例  
(四例)、外傷 (打撲、骨折など) 六例 (四例)、関節炎五例  
(二例)、その他 (壞疽、動脈瘤、兎唇) の三十五症例が記載  
されている。

- (1) 消毒には石炭酸液二〜四%、ヨードチンキを使用
- (2) 麻酔使用例 (肢指切断、腫瘍・腫瘤剔除など) では  
クロロホルムを使用
- (3) 膿瘍、瘻孔などの治療は切開排膿する。症例により